

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成14年3月16日 9時20分～11時50分)

注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」あとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) 1間に二つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 28歳の女性。妊娠30週。子宮底長は22cmであり、腹部超音波検査で羊水はほとんど認められない。

この胎児について考えられるのはどれか。

- (1) 食道閉鎖
- (2) 心室中隔欠損
- (3) 肺低形成
- (4) 腎低形成
- (5) 胎児水腫

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

2 33歳の初産婦。妊娠39週。10分周期の陣痛が発来し来院した。妊娠8週の自然流産歴が2回ある。不妊外来での治療後、今回の妊娠が成立した。定期的妊婦健康診査では、特に異常は指摘されていない。入院時の内診所見は子宮口2cm開大、展退度60%、下降度SP-2で破水を認めた。入院時と2時間後との胎児心拍数陣痛図(別冊No. 1A、B)を別に示す。

考えられる病態はどれか。

- a 微弱陣痛
- b 脘帶脱出
- c 児頭圧迫
- d 癒着胎盤
- e 胎盤機能不全

別冊

No. 1 図A、B

3 23歳の女性。息苦しさと動悸とを主訴に来院した。半年前、のんびりテレビを見ている最中に突然息苦しくなり、動悸・頻脈と過呼吸とが出現した。同時に極度の恐怖に襲われ、感覚が麻痺し、気を失いそうになった。しばらく座っていたところ症状は完全に消えた。しかし、その後もたびたび同様の発作が起きた。精査で循環器・呼吸器系に異常がみられない。

この疾患の発作中にみられるのはどれか。

- (1) 広場恐怖
- (2) 社会恐怖
- (3) 不潔恐怖
- (4) 死の恐怖
- (5) 発狂の恐怖

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

4 18歳の女子。極度のやせを家族が心配して母親に連れられて来院した。7か月前、体重は48kgであったが太っていると思い込み、食事摂取量を減らし始めた。

4か月前から体重は32kgである。身長155cm。ときに過食するが、そのあとは意図的に嘔吐している。家族の食事はいとわず作る。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 脱毛
- b 嘔声
- c 無月経
- d 皮膚湿潤
- e 下腿浮腫

5 22歳の男性。不眠を訴えて来院した。就職したころから夜なかなか眠れず、明けがたになってやっと眠りについて、昼ごろまで眠ってしまい、会社での遅刻や欠勤が続いている。親にも協力してもらい、定時に出勤するよう努めるが、眼気が強く仕事にならない。職場では意志が弱いといつも注意されている。性格は真面目で努力家である。

適切な対応はどれか。

- (1) 上司から厳しく注意してもらう。
- (2) 抗うつ薬を投与する。
- (3) ハロペリドールを投与する。
- (4) 睡眠導入薬を投与する。
- (5) 高照度光療法を行う。

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

6 13歳の女子。出生時から頭頂部に脱毛斑が存在していた。最近表面がザラザラしてきたため来院した。頭頂部の写真(別冊No. 2)を別に示す。

この疾患に合併する頻度の高いのはどれか。

- a 有棘細胞癌
- b 基底細胞癌
- c 悪性黒色腫
- d Kaposi肉腫
- e Merkel細胞癌

別冊

No. 2 写真

7 52歳の女性。顔面の皮疹と発熱を主訴に来院した。3日前から悪寒とともに右顔面に発疹が出現し、昨日から左顔面に拡大してきた。体温39°C。赤血球400万、白血球13,000。CRP3.9mg/dl(基準0.3以下)。顔面の写真(別冊No. 3)を別に示す。

まず投与すべき薬剤はどれか。

- a 抗菌薬
- b 抗ウイルス薬
- c 抗真菌薬
- d 非ステロイド性抗炎症薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

別冊
No. 3 写 真

8 30歳の男性。一昨日、仕事中に木の枝が左眼に当たり、昨夕から左眼の異物感と眼痛とが増強したため来院した。角膜中央部に潰瘍を認める。

最も適切な治療薬はどれか。

- a 抗菌薬
- b 人工涙液
- c インターフェロン
- d ガンマグロブリン
- e 副腎皮質ステロイド薬

9 4歳の男児。先天性感音難聴で、生後8か月から補聴器装着下の言語訓練を行っていた。発声・発語の発達が不十分なため、聴覚改善の手術をした。手術後の頭部エックス線写真(別冊No. 4)を別に示す。

行われた手術はどれか。

- a 鼓室換気チューブ留置術
- b 鼓室形成術
- c 人工内耳植え込み術
- d 外耳道形成術
- e アブミ骨手術

別冊
No. 4 写 真

10 60歳の男性。舌の痛みを主訴に来院した。3か月前から舌の痛みが出現し徐々に増悪してきた。舌の左辺縁部に浅い潰瘍を認め、硬結を触れる。潰瘍部の擦過細胞診はClass Vである。舌の写真(別冊No. 5A)と頭頸部造影CT(別冊No. 5B)とを別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 白斑(板)症は前癌病変である。
 - (2) 頸部リンパ節への転移は少ない。
 - (3) 移行上皮癌が多い。
 - (4) 化学療法が有効である。
 - (5) 小線源治療が有効である。
- a (1), (2), (3)
 - b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5)
 - d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

別冊
No. 5 写真A、B

11 48歳の男性。昨日、作業中に左眼に鉄片異物が飛入し、次第に視力が低下したため来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左手動弁(矯正不能)。前(眼)房は浅く限局性角膜混濁と白内障とを認める。眼底は透見不能である。

異物の確認に最も有用な検査はどれか。

- a 視野検査
- b 暗順応検査
- c 網膜電図(ERG)
- d 頭部単純MRI
- e 頭部エックス線単純撮影

12 5か月の乳児。5日前から鼻水と咳とが続いていたが、発熱はなく、元気もよかつた。昨日夕方から咳がひどくなり、呼吸がゼーゼーと苦しそうになってきたので来院した。体温37.2°C。呼吸数56/分。呼吸困難があり、口唇に軽度のチアノーゼを認める。胸部聴診で、呼気の延長、喘鳴およびわずかな coarse crackles(湿性ラ音)を聴取する。白血球8,700。CRP0.9mg/dl(基準0.3以下)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air): pH 7.35, PaO₂ 45 Torr, PaCO₂ 48 Torr。胸部エックス線写真は、軽度肺気腫像を示す。

原因として最も考えられるのはどれか。

- a コクサッキーウイルス
- b RSウイルス
- c クラミジア
- d マイコプラズマ
- e インフルエンザ桿菌

13 22歳の女性。1週前から時々、喀痰に血液が混入するようになり来院した。1年前から咳をする時に、口腔内にかび臭を感じていた。身長167cm、体重58kg。脈拍68/分、整。血圧106/70mmHg。胸部に心雜音はなく、左肺野にfine crackles(捻髪音)を聴取する。赤沈20mm/1時間、白血球9,600。CRP0.9mg/dl(基準0.3以下)。来院時の胸部エックス線写真(別冊No. 6A)と胸部単純CT(別冊No. 6B)とを別に示す。

この患者に最も適切な治療はどれか。

- a 抗菌薬投与
- b 抗癌薬投与
- c 抗結核薬投与
- d 手術療法
- e 気管支動脈塞栓術

別冊
No. 6 写真A、B

14 3歳の女児。感冒様症状を繰り返すため来院した。1歳ころから半年に1回ほど発熱と咳嗽とを伴う感冒様症状を繰り返しており、その都度、近医で治療を受けてきた。胸部エックス線写真(別冊No. 7A)、胸部CT(別冊No. 7B)及び大動脈造影写真(別冊No. 7C)を別に示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 気管支囊胞
- b 気管支閉鎖症
- c 肺分画症
- d 肺動静脈瘻
- e 気腫性囊胞

別冊
No. 7 写真A、B、C

15 61歳の男性。事務職。6か月前から労作時呼吸困難を自覚し、徐々に悪化したので来院した。2年前から乾性咳嗽に気付いていたが放置していた。胸部にfine crackles(捻髪音)を聴取する。白血球5,600。CRP0.2mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 8A)と胸部単純CT(別冊No. 8B)とを別に示す。

この疾患で低下しないのはどれか。

- a 肺活量
- b 全肺気量
- c 拡散能
- d 1秒率
- e 動脈血酸素分圧

別冊

No. 8 写真A、B

16 56歳の男性。住民健診で胸部異常陰影を指摘され精密検査のため来院した。自覚症状はない。身長172cm、体重70kg。胸部の身体所見では異常はない。血液検査に異常を認めない。誘発喀痰の結核菌検査と細胞診とは陰性である。胸部単純CTで孤立性結節を認める。結節内に石灰化を認めない。肺野条件の胸部単純CT(別冊No. 9)を別に示す。

診断確定のために最も適切な検査はどれか。

- a 超音波検査
- b 気管支動脈造影
- c ガリウムシンチグラフィ
- d 経気管支肺生検
- e CTガイド下針生検

別冊

No. 9 写 真

17 38歳の男性。頻回に生じる動悸発作のため来院した。以前から年に数回、1～2時間持続する動悸を自覚していたが自然に消失するために放置していた。意識を消失したことはない。血圧126/74mmHg。胸部の身体所見に異常はない。非発作時的心電図(別冊No. 10)を別に示す。

動悸発作の原因と考えられる不整脈はどれか。

- a 房室ブロック
- b 心房粗動
- c 心室性期外収縮
- d 上室性頻拍
- e 心室性頻拍

別冊

No. 10 図

18 38歳の女性。歩行中乗用車にはねられ救急車で来院した。意識は清明であったが顔面蒼白で低血圧と頻脈とを呈した。脾破裂による腹腔内出血があり、直ちに全身麻酔下に緊急手術が開始された。術中大量輸液と輸血により血圧は90/68mmHgに回復したが、気管内に多量のピンク色泡沫状の分泌物を生じた。頸静脈怒張を認め、胸部にギャロップとcoarse crackles(湿性ラ音)とを聴取する。脈拍112/分、整。血液所見：赤血球450万、Hb13.6g/dl、白血球5,800。動脈血ガス分析(人工呼吸、FiO₂0.6)：pH7.36、PaO₂92Torr、PaCO₂42Torr、BE-1mEq/l。中心静脈圧17cmH₂O。

適切な治療薬はどれか。

- (1) ドパミン
- (2) フロセマイド
- (3) 重炭酸ナトリウム
- (4) プロカインアミド
- (5) プロプロラノロール

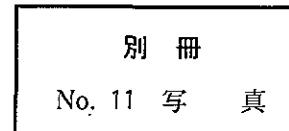
a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

19 3歳の男児。チアノーゼの増強を主訴に来院した。出生直後から収縮期心雜音を認めた。生後3か月からチアノーゼが出現し、最近歩行時にしゃがみこむようになった。脈拍90/分、整。血圧110/80 mmHg。血液所見：赤血球510万、Hb13.8 g/dl、Ht48%。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH7.38、PaO₂48 Torr、PaCO₂38 Torr。心エコー左室長軸断層像(別冊No. 11)を別に示す。

この疾患の適切な術式はどれか。

- (1) 肺動脈絞扼術
- (2) 大動脈縮窄修復術
- (3) 心室中隔欠損閉鎖術
- (4) 右室流出路再建術
- (5) Fontan手術

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

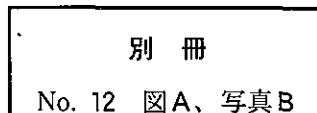


20 66歳の男性。胸痛発作を主訴に来院した。2か月前から労作時に3～5分間続く胸痛発作が出現し、安静により寛解した。2週前から胸痛発作の回数が増加し、軽労作でも出現するようになった。脈拍92/分、整。血圧134/88 mmHg。頸静脈の怒張はない。胸部に心拡大はなく、ラ音を聴取しない。下腿に浮腫を認めない。血液所見：赤血球430万、Hb13.4 g/dl、白血球6,900。発作時的心電図(別冊No. 12A)と左冠動脈造影写真(別冊No. 12B)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- (1) 抗凝血薬投与
- (2) 強心薬投与
- (3) 利尿薬投与
- (4) 経皮的冠動脈形成術
- (5) 冠動脈バイパス術

a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)



21 68歳の男性。3日前からの胸痛を主訴に来院した。胸痛は呼吸で変動し、臥位で増強した。体温 37.4°C。呼吸数 18/分。脈拍 78/分、整。血圧 100/70 mmHg。心音は減弱し、心膜摩擦音を聴取する。肺野にラ音を聴取しない。肝を触知せず、下腿に浮腫を認めない。血液所見：赤血球 400 万、Hb 12.3 g/dl、白血球 7,800。胸部エックス線写真(別冊No. 13A)と心電図(別冊No. 13B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性心膜炎
- b 急性心筋梗塞
- c うつ血性心不全
- d 肥大型心筋症
- e 左房粘液腫

別 冊

No. 13 写真A、図B

22 53歳の女性。突然の強い胸腹部痛を主訴に救急車で来院した。10年前から高血圧の治療を受けている。来院時の脈拍 92/分、整。上肢の血圧 180/92 mmHg。下肢は冷感を伴い、脈拍動は微弱。血液所見：赤血球 360 万、Hb 10.2 g/dl、Ht 31%。胸部造影 CT(別冊No. 14)を別に示す。

この疾患に合併するのはどれか。

- (1) 大動脈弁閉鎖不全
- (2) 僧帽弁閉鎖不全
- (3) 心室中隔穿孔
- (4) 冠動脈閉塞
- (5) 心タンポナーデ

- a (1), (2), (3)
- b (1), (2), (5)
- c (1), (4), (5)
- d (2), (3), (4)
- e (3), (4), (5)

別 冊

No. 14 写 真

23 24歳の男性。下肢の浮腫を主訴に来院した。眼球結膜に軽度の黄染を認める。頸部の静脈怒張はない。軽度の腹水貯留と下腿の中等度の浮腫・静脈怒張とを認め。血清生化学所見：尿素窒素 15 mg/dl、クレアチニン 0.8 mg/dl、総ビリルビン 3.1 mg/dl、直接ビリルビン 0.7 mg/dl、AST(GOT) 40 単位(基準 40 以下)、ALT(GPT) 52 単位(基準 35 以下)、アルカリホスファターゼ 483 単位(基準 260 以下)。下大静脈造影と右房造影とを同時に施行した写真(別冊No. 15)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 腎不全
- b 肝癌
- c 上大静脈症候群
- d Budd-Chiari 症候群
- e 胆石

別冊

No. 15 写真

24 18歳の女子。2か月前から摂食後に恶心と嘔吐とを生じるようになり来院した。腹痛はない。上半身を前屈して食事をすると恶心と嘔吐とは軽減するという。身長 156 cm、体重 37 kg。腹部は全体に陥凹し、腸雜音の亢進はなく、圧痛もない。CA 19-9 26 U/ml(基準 37 以下)。上部消化管造影写真(別冊No. 16)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 幽門狭窄
- b 十二指腸潰瘍
- c 十二指腸腫瘍
- d 上腸間膜動脈症候群
- e 脾癌

別冊

No. 16 写真

25 41歳の女性。健康診断の上部消化管造影で異常を指摘されて来院した。腹部は平坦で圧痛はなく、腫瘍も触知しない。血液所見：Hb 13.2 g/dl、白血球 4,700、血小板 23万。血清生化学所見：総ビリルビン 0.8 mg/dl、AST(GOT) 25 単位(基準 40 以下)、ALT(GPT) 20 単位(基準 35 以下)、アルカリホスファターゼ 247 単位(基準 260 以下)、CEA 2.5 ng/ml(基準 5 以下)。胃前庭部内視鏡写真(別冊No. 17 A)と同部の切除組織 H-E 染色標本(別冊No. 17 B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 胃腺腫
- b 胃平滑筋腫
- c 胃カルチノイド
- d I型早期胃癌
- e 迷入隕

別冊

No. 17 写真A、B

26 28歳の女性。10日前から血便を認めたため来院した。恶心、嘔吐や腹痛はなく、排便回数は1、2行/日である。父親が38歳で大腸癌で死亡している。血液所見：赤血球386万、Hb 10.8 g/dl、白血球4,800、血小板40万。血清生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、尿素窒素18 mg/dl、総コレステロール180 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST(GOT)28単位(基準40以下)、ALT(GPT)22単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ140単位(基準260以下)。注腸造影写真(別冊No. 18A)と大腸内視鏡写真(別冊No. 18B)とを別に示す。

この疾患で適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 副腎皮質ステロイド薬注腸
- c ポリペクトミー
- d 内視鏡的粘膜切除
- e 大腸全摘術

別冊
No. 18 写真A、B

27 32歳の男性。肛門周囲からの膿排出を主訴に来院した。排便時の疼痛、出血および発熱はない。1か月前に肛門周囲膿瘍で切開術を受けている。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 肛門陰窓(anal crypt)からの感染に起因する。
 - (2) 見張りいぼ(sentinel skin tag)を伴う。
 - (3) 3、7および11時の位置に好発する。
 - (4) Crohn病に伴うものは難治性である。
 - (5) 乳幼児では保存的治療で治癒することが多い。
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

28 54歳の男性。1週前から体重の増加と腹部膨満とを認め、腹痛と発熱とが出現したため来院した。5年前から肝硬変として経過観察中である。眼球結膜は黄染し、腹部に波動を認め、腹部全体に軽度の圧痛を認める。腹水所見：淡黄色、蛋白濃度低値、アミラーゼ低値、好中球多数。立位腹部エックス線単純写真で異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 十二指腸潰瘍穿孔
- b 急性脾炎
- c 特発性細菌性腹膜炎
- d 結核性腹膜炎
- e 癌性腹膜炎

29 67歳の男性。健康診断で肝機能異常を指摘され精査のため来院した。自覚症状はない。35歳時に胃潰瘍のため胃切除術を受け、この時輸血が行われた。肝は正中線上で3cm触れ、脾濁音界の拡大がある。下腿に浮腫を認める。血液所見：赤血球385万、Hb 10.5 g/dl、白血球4,200、血小板10万。血清生化学所見：総蛋白7.0 g/dl、アルブミン3.1 g/dl、ZTT 16(基準4.0~14.5)、総ビリルビン0.9 mg/dl、AST(GOT)97単位(基準40以下)、ALT(GPT)120単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ350単位(基準260以下)、γ-GTP 75単位(基準8~50)。免疫学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陽性、AFP 35 ng/ml(基準20以下)、CA 19-9 20 U/ml(基準37以下)。腹部超音波写真(別冊No. 19)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

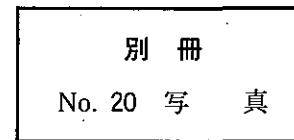
- a 肝囊胞
- b 肝海綿状血管腫
- c 肝細胞癌
- d 肝内胆管癌
- e 転移性肝癌

別冊
No. 19 写 真

30 65歳の女性。1か月前からの左上腹部痛と背部痛とを主訴に来院した。6か月前から背部の張り感を自覚していた。肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球370万、白血球6,200、血小板28万。血清生化学所見：総蛋白7.0 g/dl、アルブミン4.5 g/dl、総ビリルビン0.4 mg/dl、AST(GOT)17単位(基準40以下)、ALT(GPT)8単位(基準35以下)、LDH299単位(基準176~353)、アルカリホスファターゼ343単位(基準260以下)、アミラーゼ40単位(基準37~160)。CA19-9 36 U/ml(基準37以下)。腹部エックス線単純写真(別冊No. 20)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 胆石症
- b 急性膵炎
- c 慢性膵炎
- d 膵嚢胞
- e 膵癌



31 52歳の男性。健康診断の腹部超音波検査で膵体部に3cmの不整形で充実性低エコーの腫瘍を指摘され、精査のため来院した。自覚症状はない。腹部は平坦で圧痛はなく、腫瘍は触知しない。免疫学所見：CEA 17 ng/ml(基準5以下)、CA19-9 366 U/ml(基準37以下)。

確定診断に有用なのはどれか。

- (1) 上部消化管造影
 - (2) 注腸造影
 - (3) 腹部造影 CT
 - (4) ERCP
 - (5) 腹腔動脈造影
- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| a (1), (2), (3) | b (1), (2), (5) | c (1), (4), (5) |
| d (2), (3), (4) | e (3), (4), (5) | |

32 53歳の男性。昨夜大量に飲酒した。今朝、数回嘔吐した直後から激しい心窓部痛が出現したため来院した。体温37.8°C。呼吸数35/分。脈拍110/分、整。血圧96/60 mmHg。腹部は平坦、軟で肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球520万、Ht 45%、白血球12,000、血小板32万。上部消化管造影写真(別冊No. 21)を別に示す。

この患者にみられるのはどれか。

- (1) 皮下出血
 - (2) 頸部皮下気腫
 - (3) 左肺呼吸音減弱
 - (4) 左声音振盪減弱
 - (5) 腸雜音亢進
- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| a (1), (2), (3) | b (1), (2), (5) | c (1), (4), (5) |
| d (2), (3), (4) | e (3), (4), (5) | |



33 23歳の男性。2週前から全身倦怠感と37°C台の発熱とが続き、昨日から歯肉出血が出現したため来院した。眼瞼結膜は貧血様。皮膚に紫斑を認める。血液所見：赤血球312万、Hb 9.3 g/dl、Ht 28.4%、白血球2,300、血小板2.5万。血清生化学所見：総蛋白8.3 g/dl、アルブミン4.5 g/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST(GOT)45単位(基準40以下)、ALT(GPT)30単位(基準35以下)、LDH 680単位(基準176～353)。骨髄血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 22)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド薬投与
- b 抗胸腺細胞グロブリン(ATG)投与
- c 全トランス型レチノイン酸投与
- d 多剤併用化学療法
- e 同種骨髄移植

別冊

No. 22 写 真

34 56歳の男性。全身の痒みを主訴に来院した。1年前から同僚に赤ら顔を指摘され、また同じころに定期健診で血液異常を指摘されたが放置した。最近、頭重と耳鳴りとを自覚するようになった。家族歴と既往歴とに特記することはない。喫煙は5年前に止めた。呼吸数20/分。脈拍84/分、整。血圧146/94 mmHg。顔色は暗赤紫色調で口唇にチアノーゼを認める。皮膚には搔破痕があり、四肢静脈は怒張している。頸部リンパ節腫大はない。胸部には異常なく、腹部で左肋骨弓下に脾の先端を触知する。血液所見：赤血球670万、Hb 18.5 g/dl、Ht 53%、白血球11,200(好中球75%、好酸球3%、好塩基球5%、単球3%、リンパ球14%)、血小板54万。血清生化学所見：総蛋白7.1 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、尿素窒素19 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、尿酸7.8 mg/dl、AST(GOT)37単位(基準40以下)、ALT(GPT)32単位(基準35以下)、LDH 430単位(基準176～353)、Fe 25 μg/dl(基準80～160)、総鉄結合能376 μg/dl(基準290～390)、フェリチン18 ng/ml(基準20～120)、CRP 0.2 mg/dl(基準0.3以下)。

この患者で低下するのはどれか。

- (1) 平均赤血球容積(MCV)
 - (2) 好中球アルカリホスファターゼ指数
 - (3) 動脈血酸素飽和度
 - (4) 循環赤血球量
 - (5) 血中エリスロポエチン濃度
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

35 生後 40 日の乳児。昨日から不機嫌となり、今朝吐血したため来院した。在胎 40 週、自然分娩、体重 3,040 g で出生した。Apgar スコア 9 点(1 分)、10 点(5 分)。母乳栄養である。今朝 2、3 回けいれん様に体をふるわせた。身長 52 cm、体重 3,850 g。大泉門はやや膨隆している。痛み刺激への反応が少し鈍い。心雜音はない、ラ音も聴取しない。腹部は軽度膨隆しているが、腫瘍は触れない。肝を右肋骨弓下に 1 cm 触知する。脾は触れない。膝蓋腱反射は亢進し、Babinski 徴候は陽性である。

この患児で低値が考えられるのはどれか。

- a 血小板
- b 血糖
- c カリウム
- d カルシウム
- e ビタミンK

36 54 歳の男性。蛋白尿の精査加療を目的として来院した。13 年前に糖尿病と診断され、食事指導を受けたことがある。4 か月前の健康診断で尿糖と尿蛋白とを指摘された。身長 165 cm、体重 67 kg。脈拍 70/分、整。血圧 140/90 mmHg。尿所見：蛋白 1+、糖(±)、沈渣に異常はない。血清生化学所見：空腹時血糖 130 mg/dl、HbA_{1c} 7.5% (基準 4.3~5.8)、尿素窒素 20 mg/dl、クレアチニン 1.2 mg/dl。

血糖コントロールに加えて行うべき治療はどれか。

- a 高蛋白食
- b β 受容体遮断薬
- c アンジオテンシン変換酵素阻害薬
- d 副腎皮質ステロイド薬
- e 免疫抑制薬

37 7 歳の男児。前夜からの激しい腹痛、関節痛および下腿の皮疹を訴えて来院し、入院した。入院時タル便を認めた。尿所見：蛋白 1+、沈渣に赤血球多数/1 視野。血液所見：赤血球 430 万、白血球 9,600、血小板 25 万。出血時間、凝固時間およびプロトロンビン時間は正常。第 7 病日、顔面と下腿とに浮腫が出現した。血圧 134/82 mmHg。尿所見：蛋白 3+、沈渣に赤血球無数/1 視野、赤血球円柱(+)。血清生化学所見：総蛋白 4.2 g/dl、アルブミン 2.6 g/dl、尿素窒素 17 mg/dl、クレアチニン 0.9 mg/dl、総コレステロール 350 mg/dl。免疫学所見：ASO 250 単位 (基準 250 以下)、抗核抗体陰性、血清補体価正常。下腿の写真(別冊 No. 23)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- (1) 急性糸球体腎炎
- (2) 膜性増殖性腎炎
- (3) 巢状糸球体硬化症
- (4) 紫斑病性腎炎
- (5) ネフローゼ症候群

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 23 写真

38 77歳の男性。6年前から頻尿、残尿感および排尿困難があったが、最近、症状が悪化したため来院した。腹部は平坦で腸雜音は正常。尿所見に異常はない。血清生化学所見：尿素窒素 28 mg/dl、クレアチニン 1.2 mg/dl。PSA（前立腺特異抗原）2.3 ng/ml（基準 4.0 以下）。静脈性尿路造影 30 分の写真（別冊No. 24）を別に示す。

みられる所見はどれか。

- (1) 膀胱瘤
 - (2) 膀胱憩室
 - (3) 膀胱肉柱形成
 - (4) 前立腺肥大
 - (5) 水腎症
- a (1), (2), (3)
 - b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5)
- d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

別 冊

No. 24 写 真



39 26歳の未妊女性。3か月前から不正性器出血が持続し来院した。結婚後2年経過したが妊娠に至らない。子宮は軽度腫大し、付属器を触知しない。経腔超音波検査で子宮内膜の肥厚を認め、両側卵巣に多数の卵胞を認める。基礎体温は低温一相性。血中ホルモン値：LH 12.8 mIU/ml（基準 2.1～7.0）、FSH 5.0 mIU/ml（基準 4.4～8.0）、エストラジオール 62 pg/ml（基準 25～75）。内膜組織診の H-E 染色標本（別冊No. 25）を別に示す。

この患者に対する適切な治療はどれか。

- (1) 黄体ホルモン療法
 - (2) 排卵誘発療法
 - (3) 子宮頸部円錐切除術
 - (4) 単純子宮全摘術
 - (5) 放射線治療
- a (1), (2)
 - b (1), (5)
 - c (2), (3)
 - d (3), (4)
 - e (4), (5)

別 冊

No. 25 写 真

40 54歳の女性。1か月前から時々少量の性器出血があり来院した。未経妊で、閉経は49歳。子宮は正常大で、子宮頸部にびらんを認めない。頸部細胞診は陰性で、ヒステロスコピー写真(別冊No. 26A)と内膜細胞診 Papanicolaou 染色標本(別冊No. 26B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 子宮腺筋症
- b 単純型子宮内膜増殖症
- c 複雑型子宮内膜増殖症
- d 子宮内膜腺癌
- e 子宮平滑筋肉腫

別冊

No. 26 写真A、B



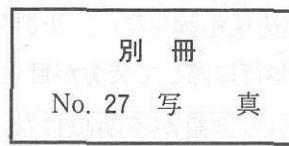
41 日齢10の男の新生児。在胎26週時の胎児超音波検査で腹部に両側性囊胞性病変を指摘された。その後の定期的検査で囊胞性病変の軽度増大傾向が認められたが、羊水量に異常はなかった。在胎39週1日、自然分娩で出生した。出生体重2,960g。Apgarスコア8点(1分)、9点(5分)。血清生化学所見: 尿素窒素18mg/dl、クレアチニン0.6mg/dl。腹部MRIのT₂強調冠状断像(別冊No. 27)を別に示す。

この疾患で誤っているのはどれか。

- a 両側の腎盂尿管移行部の通過障害である。
- b 胎児期は原則的に経過観察が第一選択となる。
- c 出生後は腹部腫瘍が発見の契機となる。
- d 出生後に尿路感染を起こしやすい。
- e 出生後は手術の絶対的適応である。

別冊

No. 27 写 真



42 9歳の男児。今朝から右半身の動きが少なくなり、母親に連れられて来院した。3歳から啼泣時に左上下肢の動きが悪いことに母親は気付いていたが放置していた。来院時、意識は清明。項部硬直はみられない。右半身の不全麻痺と感覺鈍麻とを認める。

最も考えられるのはどれか。

- a もやもや病
- b Leigh 症候群
- c 多発性硬化症
- d 重症筋無力症
- e 副腎白質ジストロフィー

43 65歳の男性。筋力低下を主訴に来院した。1年前から上肢の筋がやせて筋力が低下してきた。5か月前から歩行に際して疲労が目立つようになり、階段を上るのが困難となった。2か月前から言語が不明瞭になった。意識は清明。身長170cm、体重53kg。呼吸数26/分、整。舌の萎縮を認める。四肢に筋萎縮と中等度の筋力低下とを認める。上下肢ともに深部腱反射は亢進し、Babinski 徴候は両側で陽性。感覺は正常。排尿障害はない。

この疾患で病変がみられるのはどれか。

- (1) 中脳黒質
 - (2) 舌下神経核
 - (3) 脊髄前角
 - (4) 脊髄側角
 - (5) 脊髄神経節
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

44 4か月の乳児。両手を挙上する発作を主訴に来院した。1週前から1日2、3回、何かに驚いたように両上肢を瞬間にピクつかせる動作が出現した。発作時意識消失がなく、発作後は笑っていた。発作は連続して5、6回シリーズをして起こるようになり、これが1日に20シリーズ以上になった。両上肢の挙上と同時に頭部を前屈する発作となり、あやしても笑わなくなつた。意識は清明。体格・栄養中等度。体温36.7°C。引き起こし反射で頭部後屈を認め、首の坐りが遅れている。両側深部腱反射は正常であり、両側 Babinski 徵候は陽性である。大腿外側部の写真(別冊No. 28A)と脳波(別冊No. 28B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a フェニルケトン尿症
- b メープルシロップ尿症
- c 結節性硬化症
- d 白皮症
- e 色素性乾皮症

別冊

No. 28 写真A、図B

45 65歳の女性。1年前から歩行開始時の右膝痛を自覚し、最近増悪したため来院した。身長158cm、体重69kg。右膝は内反変形を伴い、内側の疼痛と関節水腫とを認める。右膝エックス線単純写真で内側の関節裂隙の狭小化と軟骨下骨の骨硬化とを認める。

生活指導で適切なのはどれか。

- (1) 足底板の使用
 - (2) 肥満の是正
 - (3) 膝伸展位で下肢挙上訓練
 - (4) 膝関節屈筋の筋力強化
 - (5) 膝関節屈曲の可動域訓練
- a (1), (2), (3)
 - b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5)
 - d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

46 12歳の男児。6か月前から左下腿遠位に無痛性の隆起を自覚し来院した。膝関節と足関節との可動域は正常である。左下腿骨のエックス線単純写真(別冊No. 29)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 骨腫
- b 骨軟骨腫
- c 類骨骨腫
- d 骨巨細胞腫
- e 単発性骨囊腫

別冊
No. 29 写真

47 36歳の男性。2か月前から頭痛、めまい及びふらつきが出現したため来院した。14歳時に両側眼底出血の既往がある。意識は清明。眼振、四肢協調運動障害および体幹失調を認める。四肢の麻痺と感覚障害とはみられない。頭部MRIのT₁強調像(別冊No. 30A)、造影T₁強調像(別冊No. 30B)及び椎骨動脈造影側面像(別冊No. 30C)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 脳動脈瘤
- b 神經線維腫症
- c 神經皮膚黑色症
- d Sturge-Weber症候群
- e von Hippel-Lindau病

別冊

No. 30 写真A、B、C

48 17歳の男子。二次性徴の遅れが気になり来院した。12歳の時、トルコ鞍上に進展する径5cmの頭蓋咽頭腫の摘出術を受けた。再発はないが、術後1年ころから肥満傾向が出現し、徐々に高度になってきた。恥毛を認めない。精巣サイズは左右とも長径1cmである。

考えられるのはどれか。

- a Chiari-Frommel症候群
- b Fröhlich症候群
- c Kallmann症候群
- d Laurence-Moon-Biedl症候群
- e Prader-Willi症候群

49 38歳の女性。易疲労感、便秘および月経不順を主訴に来院した。体温 35.5°C。脈拍 56/分、整。血圧 126/86 mmHg。顔面は浮腫状で、皮膚は乾燥している。びまん性の硬い甲状腺腫を触れるが、圧痛はない。血清 TSH 80 μU/ml (基準 0.2~4.0)、free T₄ 0.3 ng/dl (基準 0.8~2.2)、血清プロラクチン 28 ng/ml (基準 15 以下)。

最も考えられるのはどれか。

- a 下垂体機能低下症
- b 腺腫様甲状腺腫
- c 亜急性甲状腺炎
- d 慢性甲状腺炎
- e 甲状腺癌

50 37歳の女性。高カルシウム血症を指摘され、原因精査を希望して来院した。1か月前に尿路結石で治療を受けた。28歳で下垂体腺腫摘出術を受けた。また、母と姉にも尿路結石の既往がある。血清 Ca 12.8 mg/dl、P 2.1 mg/dl。血漿副甲状腺ホルモン<PTH> 133 pg/ml (基準 10~60)。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 膵島腫瘍
- b 甲状腺髓様癌
- c 褐色細胞腫
- d 粘膜神経腫
- e 多発性骨髄腫

51 5歳の男児。今朝から頻回の嘔吐と腹痛とを訴えて来院した。数日後に幼稚園で発表会が予定され、本人は気にしていた。2歳ころから、叱られたり、精神的緊張が強いと嘔吐を繰り返すという。体温 37.2°C。元気がなく傾眠状である。眼瞼結膜に貧血はない。心雜音はなく、呼吸音に異常はない。腹部は陥凹し、腹壁緊張は著明に低下し、腸雜音の減弱を認める。大腿動脈音を聴取する。項部硬直とKernig 徵候とを認めない。神経学的所見に異常はない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、アセトン体 3+、潜血(-)。血清生化学所見：血糖 80 mg/dl、尿素窒素 22 mg/dl、クレアチニン 0.8 mg/dl、Na 135 mEq/l、K 4.5 mEq/l、Cl 105 mEq/l、CRP 0.2 mg/dl (基準 0.3 以下)。

この患児への対応として最も適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 経口的水分補給
- c 鎮静薬投与
- d 制吐薬投与
- e 輸液

52 10歳の男児。黄疸と意識障害とを主訴に救急車で搬送された。数日前から感冒に罹患していたが元気であった。今朝、意識がなく呼んでも返事がなかった。意識は傾眠傾向で、皮膚は黄染が著明である。表在リンパ節の腫脹はない。眼球結膜に著明な黄疸と眼瞼結膜に貧血とを認める。弾性硬の肝を右肋骨弓下に4cm触知し、脾は触れない。項部硬直とKernig徵候とを認めない。尿所見：蛋白1+、糖1+、ウロビリノゲン1+、ビリルビン3+、潜血1+。血液所見：赤血球290万、Hb 7.8 g/dl、Ht 28%、網赤血球68%、白血球2,800、血小板18万。ヘパプラスチンテスト15%（基準80~110）。血清生化学所見：尿酸1.0 mg/dl、総ビリルビン28.5 mg/dl、間接ビリルビン20.8 mg/dl、AST(GOT)220単位（基準40以下）、ALT(GPT)20単位（基準35以下）、銅210 μg/dl（基準85~120）、セルロプロラスミン0.2 mg/dl（基準20~35）。免疫学所見：HA抗体陰性、HBs抗原・抗体陰性、HCV抗体陰性、EBウイルス抗体陰性、サイトメガロウイルス抗体陰性。

この患児の基礎疾患を確定診断するのに必要な検査はどれか。

- (1) 眼科的検査
- (2) 尿中銅測定
- (3) 血中乳酸値測定
- (4) 血中ビタミンB₁値測定
- (5) Donath-Landsteiner 試験

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

53 32歳の女性。一昨日からの下肢の腫脹を主訴に来院した。3回の流産歴がある。左下肢に熱感を伴う有痛性の腫脹を認める。左足を背屈すると腓腹部に疼痛が生じる。血液所見：赤血球370万、Hb 11.0 g/dl、白血球3,200、血小板8万。プロトロンビン時間(PT)12秒（基準10~14）、APTT 62秒（基準対照32.2）。抗核抗体160倍（基準20以下）。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 一過性脳虚血発作
 - (2) 中耳炎
 - (3) 播種性血管内凝固症候群(DIC)
 - (4) 腸間膜動脈血栓症
 - (5) Budd-Chiari症候群
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5) c (1), (4), (5)
d (2), (3), (4) e (3), (4), (5)

54 35歳の女性。左手のしびれと全身倦怠感とを主訴に来院した。数か月前から微熱と全身倦怠感とがあった。おにぎりを握ると左手がしびれ、冷たくなることを自覚している。意識は清明。左橈骨動脈拍動は微弱で、左鎖骨下動脈部位に血管雜音を聴取する。血液所見：赤沈96 mm/1時間、赤血球360万、Hb 10.2 g/dl、白血球9,600、血小板46万。免疫学所見：CRP 5.6 mg/dl（基準0.3以下）、抗核抗体陰性、CH50 54単位（基準30~40）。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 失神発作
 - (2) 気管支喘息
 - (3) 回盲部潰瘍
 - (4) 腎性高血圧
 - (5) 胸部大動脈瘤
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5) c (1), (4), (5)
d (2), (3), (4) e (3), (4), (5)

55 35歳の男性。5日前から頭痛と複視とが出現し来院した。6か月前から体重減少と全身倦怠感とを自覚し、1か月前から発熱を繰り返している。意識は混濁し、頸部硬直を認める。口腔内に白苔を認める。血液所見：赤血球380万、Hb 12.6 g/dl、白血球3,500(桿状核好中球12%、分葉核好中球66%、好酸球5%、単球9%、リンパ球8%)、血小板11万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン3.2 g/dl。CRP 2.4 mg/dl(基準0.3以下)、HIV抗体陽性。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 網膜色素変性
- (2) 壊疽性鼻炎
- (3) ニューモシスチス・カリニ肺炎
- (4) 肺結核
- (5) 悪性リンパ腫

a (1), (2), (3) b (1), (2), (5) c (1), (4), (5)
d (2), (3), (4) e (3), (4), (5)

56 30歳の男性。下着に小さなシミが付くため来院した。2日前から軽い排尿痛と透明な尿道分泌物とがあった。10日前に性行為があったという。外尿道口に軽度の発赤を認めるほかは、陰茎、精巣および精巣上体に異常を認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、沈渣に赤血球(-)、白血球5~10/1視野。

考えられる起因病原体はどれか。

- a Cytomegalovirus
- b Chlamydia trachomatis
- c Escherichia coli
- d Mycobacterium tuberculosis
- e Pseudomonas aeruginosa

57 26歳の初産婦。妊娠35週。2日間持続する水様性帶下を訴えて来院した。妊娠経過中異常は指摘されなかった。体温38.4°C。脈拍120/分、整。血圧124/68 mmHg。来院時の腔鏡診で後腔円蓋から採取した白色不透明の液体は、弱アルカリ性、乾燥塗抹標本では羊歯状結晶を多数認めた。子宮口の開大はみられず、展退度50%、先進部は児頭であり固定していた。血液所見：Hb 11.0 g/dl、Ht 34%、白血球18,000、血小板17万。胎児心拍数陣痛図(別冊No. 31)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 子宮収縮抑制薬投与
- c 副腎皮質ステロイド薬投与
- d 分娩誘発
- e 緊急帝王切開術

別冊
No. 31 図

58 60歳の男性。3日前に同窓会の懇親会で泥酔し、何回も嘔吐を繰り返した。2日前から発熱と咳嗽、今朝から膿性痰と右側胸痛とが現れたため来院した。体温38°C。脈拍90/分、整。血液所見：白血球13,000(桿状核好中球8%、分葉核好中球72%、好酸球2%、単球3%、リンパ球15%)。CRP 14.5 mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真では右下肺野に浸潤影と胸水とを認め、試験穿刺で悪臭の強い膿性胸水を採取した。胸水のGram染色で多数の好中球とグラム陽性球菌とを認めた。

胸水培養で検出が予想されるのはどれか。

- a 大腸菌
- b 緑膿菌
- c レジオネラ
- d 嫌気性菌
- e クラミジア

59 22歳の男性。昼食1時間後から全身の瘙痒感と嘔気とを伴うようになったので来院した。体温36.5°C。脈拍80/分、整。血圧120/64mmHg。全身に地図状の疹を認める。口唇はやや腫脹している。昼食に何を食べたか聞くと、しつかりした声で「アジの干物、芋の煮つけ、豆腐のミソ汁を食べました。」と答えた。

適切な処置はどれか。

- a 輸液
- b 胃洗浄
- c 制吐薬投与
- d 抗菌薬投与
- e 抗ヒスタミン薬投与

60 原子力燃料工場が放射能漏れ事故を起こし、多数の周辺住民が町立病院を受診した。急性障害の症状を呈する者はいない。町役場、町立病院および保健所の合同調査班が、事故直後からの住民の健康への影響を調査することになった。

適切でないのはどれか。

- a 事故情報の開示を工場に求める。
- b プライバシーの保護に留意する。
- c 事故当時に居た場所を尋ねる。
- d 生活習慣を調査する。
- e 患者対照研究(case control study)として行う。

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)